

第2部 金融制度の構造と歴史

第5章 通貨制度の歴史

清田匡

はじめに

- 前章の復習
 - － 金融商品の価格としての外国為替相場
- 通貨制度の話の前に，表 1 を使って，外国為替相場と為替リスクについて説明しておく。
 - － 金融商品としての外国為替
- 通貨制度とはなにか。本章の構成（通貨制度の国内的側面と国際的側面。表 2 参照）。

1 国内の通貨制度

国内の通貨制度は，金本位制から，管理通貨制へと変わってきた。

1.1 金本位制度

- 金本位制度とは何か：貨幣が金であること。
- 銀行券の制度の成立へ
 - － 商品または金の預り証から銀行券へ（金細工師から銀行へ）
 - － 商業手形から銀行券へ（商人から銀行へ）
 - － 兌換銀行券と，兌換準備（金）を越える銀行券の発行
- 金本位制度の確立へ
 - － 商品から（商品）貨幣へ
 - － 商品貨幣のなかから金へ
 - － 金から金鑄造へ
 - － 金本位制度と銀本位制度，金銀複本位制度（江戸と大坂）
 - － 金の自由溶解と自由鑄造
 - － 金の自由輸出入
- 兌換銀行券と中央銀行
 - － 複数の兌換銀行の発生と，その集中

表 1: 外国為替相場の変動（円高・円安）と為替リスク

円高・円安（ドルは米国では通貨だが、日本国内では通貨ではない）		
ドル安（＝円高）	例 1\$=100 円 1\$=90 円	説明 ドルという商品の価格が値下り
ドル高（＝円安）	例 1\$=90 円 1\$=100 円	説明 ドルという商品の価格が値上がり
円高・円安のリスク		
ドル安（＝円高）	例 1\$=100 円 1\$=90 円	日本の輸出業者が、1\$=100 円を想定して商品輸出。円高のため円建てでの収入減
ドル高（＝円安）	例 1\$=90 円 1\$=100 円	日本の輸入業者が、1\$=90 円を想定して商品輸入。円安のため円建てでの支払増

表 2: 通貨制度の国内的側面と国際的側面

国際 \ 国内	金本位制度 ³⁾	管理通貨制度 ⁴⁾	時間の経過 ↓
	固定相場制度 ¹⁾	国際金本位制度	
	変動相場制度 ²⁾	x ⁵⁾	変動相場制度

- 1) 各国通貨の交換比率が決まっている (固定している)。
- 2) 各国通貨の交換比率が変動する。
- 3) 各国通貨が金と交換される。
- 4) 各国通貨が金と交換されない。
- 5) 金本位制度のもとでの変動相場制度が、なぜありえないのか、自分で考えてみよう。

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> - 発券集中と金準備の集中、中央銀行 - その他の銀行は、商業銀行へ - 中央銀行の兌換銀行券と金準備の関係 - 金本位制度の基本的特徴 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 貨幣は金 2. 金の自由鑄造，自由溶解 3. 金の自由輸出入 4. 金準備による兌換銀行券発行量の制限 |
|---|---|

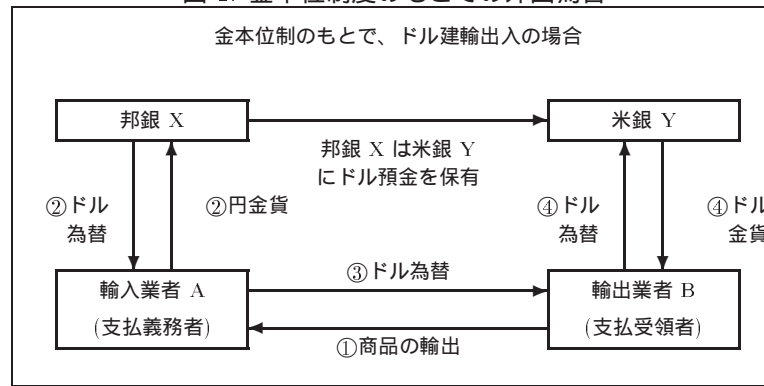
1.2 管理通貨制度

- 管理通貨制度とは何か: 貨幣が金でなくなる
こと。銀行券の発行と金準備の関係が切り離
されること 兌換銀行券は、不換銀行券に。
- 金本位制度から管理通貨制度への背景
 - 貨幣の機能の点で、金でなくても良くなる。
 - 金準備の変質: 金の預り証，銀行の債務
証書 (発券集中後) 銀行券量を規制し，
管理するための基準へ。
 - 恐慌 金準備の量を無視して，銀行券の
発行 金兌換は求められなかった 金と
銀行券のつながりが稀薄に。
 - 経済発展に，必要貨幣量の増大と，金の
乖離
- 金本位制度から管理通貨制度への移行の歴史的経過
 - 第一次大戦による国際金本位制の停止
(金の国際輸送不可能)，国内での金兌換
の停止
- 第一次大戦後の金本位制への復帰 (再建
金本位制度)
 - * 金地金本位制のケース (銀行券を金
貨ではなく，地金と交換)
 - * 金為替本位制のケース (銀行券と金
ではなく，金本位制国の通貨と交換)
- 大不況
 - * 不況 財政赤字の拡大 金利上昇
景気を圧迫
 - * 金利引き下げのための中央銀行によ
る国債購入
 - * 金準備と銀行券量の結びつきの消
失へ
- 管理通貨制度の特質
 - 金の量から独立して，通貨の量を操作す
ることが可能に。
 - 金融政策の発生
 - 管理通貨制度は，インフレ体質。通貨
の量を操作することが必要に。

2 国際通貨制度

通貨制度の国際的側面をみると，(1) 国際金本位制度 (固定相場制度) から，(2) IMF 体制 (管理通貨体制の本での固定相場制度) へ，そして，IMF 体制から，(3) 変動相場制度へと変化してきた。

図 1: 金本位制度のもとでの外国為替



前提: 金本位制のもと、国内では金が流通している。輸出入の代金は、ドルで決められている。

- ① 米国の輸出業者 B は、日本の輸入業者 A へと、商品を輸出する。
- ② 日本の輸入業者 A は、商品の代金を、金を直接、送っても良いが、金を送るコスト (金現送費、保険料等) が大きい。このために、金貨を邦銀 X にもって行き、ドル建ての金為替を購入する (ここでの円とドルの交換比率が為替相場)。
- ③ A は、B へと、この金為替を送付する。
- ④ B は、米銀 Y に、この為替を持参し、ドル金貨にしてもらう。

2.1 国際金本位制度 (固定相場制度)

- 金本位制度のもとでの国際間の決済
- 金による決済
 - 金の自由鑄造、自由溶解。金の自由輸出入が前提されると
 - 溶かして輸出入すれば、金の決済
 - * 各国の通貨名は、異なるが、金本位制のもとでは、各国通貨の金との交換比率は決まっている結果、国際間での
- このように、金で決済されるなら、仕組みは簡単だが、これは危険だし、膨大な費用がかかる (輸送料、保険料等)。
- 外国為替による決済 (図 1 参照)
 - 金現送の費用 外国為替
 - 金現送費と外国為替相場の関係

2.2 IMF 体制 (管理通貨制度のもとでの固定相場制度)

- 国内では金は流通せず、銀行券は兌換されない¹。
- 国家間でのみ金決済。
- 米国のみが金を供給 (ドルの金交換)
米国はなぜ、こんなサービス (?) をしたのか。
 - 多くの人々、国が、金と交換可能なドルを、支払の対価として受取る。
 - 各国が、米国に、ドルと金との交換を求めることは、多くはなかった。
 - 他の国々は、輸入をするためには、まず輸出をして、ドルを獲得する必要があった。
- しかし、各国が、ドルを受取り、そして、ドルを金と交換しないなら、ちょうど、国内における銀行と同様に、米国は、輸出をすることなく、自国の債務でもって、外国の商品サービスを購入できる。
- つまり、金ドルとの交換は、一見すると、米国のサービスに見えるが、実際には、米国に大きな利益をもたらした。
- しかし、この米国の赤字を可能にするシステムは、米国を慢性的な赤字体質に変動相場制へ。

2.3 変動相場制度

¹IMF 体制は、金為替本位制に類似しているが、違いは、金交換を行う国が、国内的には、金本位制ではない点。ただし、IMF 体制を、金為替本位制と呼ぶ向きもある。

- IMF 体制のもとでの、米国の国際収支の赤字の継続 (米国による金ドル交換が困難に 金ドル交換が困難だとみなされると、金ドル交換を求める声が強くなる)
 - － 前述の米国の赤字体質
 - － 第二次大戦後の経済成長の不均等性
- 金ドル交換停止 変動相場制へ
- 為替リスクの増大 (前出の表 1 参照)
 - － 為替リスクがなぜ問題なのか。
 - － 為替リスクの回避のための手段とコスト (固定相場制では不要)。

3 いくつかの単語について

- 外国為替相場
- 為替リスク (外国為替相場の変動リスク)
- 金本位制度
- 管理通貨制度
- 固定相場制度
- 変動相場制度
- 商品貨幣
- 金鑄貨
- 兌換
- 兌換銀行
- 兌換銀行券と不換銀行券
- 発券集中
- 中央銀行
- 商業銀行
- 国際金本位制度
- 金の自由鑄造, 自由溶解
- 金の自由輸出入
- 価値尺度,
- 流通手段
- 価値の蓄蔵
- 必要貨幣量
- 再建金本位制
- 金地金本位制
- 金為替本位制
- 大不況
- 金融政策
- 金の現送と現送費
- IMF 体制